「三年とうげ」の空洞を読む
― 信憑性を育んだ地域的相互依存関係 ―

松　田　典　祀

はじめに

テキストとして「三年とうげ」を読んでいて，いくつかの疑問に遭遇する．

例えば，①そもそも三年とうげの「とうげ」とは，丘陵中のどこの部分なのか．②「言い伝え」はなぜ生まれたか．③村人は「言い伝え」をどれほど信じていたか．④なぜトルトリは解決法を考え付いたか．⑤なぜおじいさんはトルトリの提言を納得したか．⑥ぬるでの木のかげから歌ったのははたして誰であったか．⑦そもそもこの作品の主題は何であるのか．といったようなことなどである．

さらに，これらの疑問のうちの一つは，文脈相互の関係を考察する中で，ある方向性の見い出しうるものと，本文中の記述だけではどうしても解き得ない疑問のあることに気づいた．

例えば，①については，おじいさんの二回目の転び方との関わりで，ある方向性は見えてくるのであるが，⑤の納得する部分については，そればかりではやはり何かはっきりしない疑問を呈さざるを得ない，という類である．これらの疑問からは，具体的には次のような矛盾する部分を指摘することができる．

Ⅰ　疑問からの問題提示

①（三年とうげは）「あまり高くない，なだらかなとうげでした．」と「とうげからふもとまで～ころがりおちてしまいました．」との整合性の問題である．「とうげ」とは「山の坂路を登り詰めた所．山の上りから下りにかかる境．――

の茶屋」（広辞苑）とあるわけだが，これは「とうげそのものの位置が高くないところにある，つまり，丘そのものの海抜を指しているのか．上りとくだりの間に存在する，いわば境をなしている平面的な面積，茶屋のある一部分が，碓氷峠のような険しいところではなく，なだらかなとうげ一帯を指しているのか分からない，ということである．そうした疑問が出てくるのは，「あまり高くないなだらかな」という表現にある．挿絵で見るかぎりは丘そのものがなだらかな感じを与える．すると，とうげも起伏の少ない，なだらかなイメージを与えることになる．つまり，ここでは丘もその頂上にあるところの峠もなだらかである，ということを暗に示している，ということになる．こう考えてくると，「あまり高くない」という修飾部はとうげにかかっているように思われるが，実は，丘陵を修飾しているわけで，その頂上にある峠をも暗に指示している，ということになる．したがって，その意味は，「余り高くないなだらかな丘の上にあるなだらかなとうげ」を表わしていることになる．こうした解釈は，更に次のような問題をはらんでくる．

ならばなぜ，なだらかな峠なのにも関わらず，おじいさんは転んだのかということである．つまり「三年とうげで転ぶでない」とは，峠そのものを指しているのであって，峠からふもとまでの間の坂道を指しているわけではない．そこで，おじいさんはあわてて立ち上がり，足を急がせている間に，だんだん暗くなったときに転んだわけであるから，この峠も一応の広さを持っていた，ということになる．殆んどが起伏のゆるい，なだらかな峠の上で，しかもあんなに気をつけていたのに転んだとなれば，これはもちろん，尋常なことではない．そんなことはあり得ない．一体おじいさんはなぜ転んだのであろう．これには，おじいさんのキャラクターの問題が含まれているとも思われるが，それにしても場所のかたちそのものに原因がある訳ではない．不思議な出来事である．

②のなぜこうした言い伝えが生まれたのか，については，何も書かれていない．険しく危険な場所であるから気をつけよ，という教訓を含んでいる，と考えられるのだが，①で見た限り，なだらかな峠である．さらにまた，なぜ「三年きりしか生きられぬ」という恐ろしい言い伝えが生まれてきたか，という疑問もある．昔，そうした実例があったとしても，余りにオーバーな普遍化である．

③の疑問はおそらく一概には論じられない．おじいさんが転ぶ前までは「みんなおそるおそる歩きました」という表現だけであるから．ああ，そうなんだ，で済まされそうだが，転んでしまった後のみんなの心配を考えると，その差が極端であり，ならば，それ以前の意識はどの程度のものであったか，それ程真剣に信じていた訳ではないような気がしてくる．これもトルトリや他の村人など，人それぞれであり，どう想像してよいか一概には言えないものがあるが．

④　何ゆえ一少年であるトルトリが人生経験も豊かなおじいさんを救える論理をみつけだせたか．ここも「水車小屋」という要素と，「そんなある日のこと」とからでしか解決の糸口はない．この作品の中からでは解きがたい何かがあるような気がしてくるのである．

⑤はおじいさんの納得があまりに唐突過ぎて，不自然である，ということである．「しばらく考えていましたが」とあるが，何を考えたのかまるで書かれていない．そこが分からないから，おじいさんの決断が読み手には納得できないということになる．ただ，二人の間によほどの深い信頼関係があって，それが相手の言うことへの信憑性を生んだということは言えると思う．そのへんを含んだ上での変容過程を明らかにしなければならない，ということである．

⑥の疑問は授業でよく取り上げられる．おそらく結論が出にくく，教師がまとめやすい，あれもこれもOKという安易性を持った課題であるからだが，指導書を読んで，次のような指示があるのを発見して驚いた．

「二つの歌を読み比べる．ここではいろいろな考えが出てきてよい．正解は一つではないです．自由に考えてみよう．と投げかけて，さまざまな意見を出させたい．トルトリという意見が大勢を占めるであろうが，おばあさん，村の人たち，神仏，山の動物たちなど自由な想像を尊重する．」こんな想像力はない．こうした発問を呼び起こすような，この場面自体の意図が不明である．

⑦誰もが言うように，「同じものでも見方を変えると結果も変わる」で止めていいのかどうか．それこそ，もっと多様な解釈が可能なのではないか．それこそが，文脈（根拠）から導き出される本当の想像力ではないのか，といった問題を提起したいのである．

以上，七つの疑問の拠ってくるところ，疑問の派生する問題点について掲げてみた．これらの問題点について，いろいろと考えているうちにこれらは先に述べたように作品の中，テキストの文脈相互関係の中から導き出せるものと，作品の外にある背景に頼らざるを得ぬものとがあるということが明らかになった．

Ⅱ　考察としての解釈

１　唐突な提言を受け入れた心理 ⑤

トルトリの発想の転換の論理を，どのような心理的プロセスを経ておじいさんは峠へ行く気になったのか，これは書かれていない．韓国の民話を載せた教科書では細かく書かれていたという[註1]が，それを見る機会もないので，ここは想像しなければならない．問題は，「しばらく」考えた，の間に何を考えたかを組み立てればいいわけだが，このとき，言うまでもないことだが，先に述べた信憑性が両者の間にしっかりと根付いていたという前提を忘れてはならない．（このことについては③とⅢで言及したい．）

まず，「三年とうげで転んだならば，三年きりしか生きられない」．ここには三年峠で転ぶ回数は述べられていない．転ぶということを一回という意味に捉えて，一回を基準にして生きる意味だけを取り出したトルトリの機転によって規定された解釈である．だから古来，「三年とうげ」で幾度も転んだら，いくらなだらかな峠であっても，あちこち打ち付けて，死なないまでも大怪我をすることは必定である．つまり，峠で転べばふもとまで転げ落ちる，その全行程を踏まえての教訓であったろう．言い伝えは，そうした危険を戒めているのであるが，トルトリはそれを一回と断定した．そして，一度転ぶと三年生きる，二度転ぶと六年生きる，の一度と一回転を同列にしたような提言をする．この場合，一回転という言葉は，マット上での回転運動のようなイメージを起こさせる．つまり，実験的に様式化されたスポーツに変転してしまったわけである．ここでは，言葉を信じたから病気になったのだから，今度も，言葉を信じれば病気から救われるという理屈を納得すればよい．つまり，単なる言葉による言葉だけのもつ呪縛がすり替わっただけである，ということを確認すれば，トルトリの理屈を納得することができるのである．これは，禅の悟りのように自得

したわけではなく，人から教えられただけであるので，その自得への生みの苦悩はおじいさんはあずかり知らぬことである．いや，おじいさんの頭の中には，一回転ぶと三年生きるという理屈に基づいた，解釈上の解決策を持ち出されて，理屈上の納得をする．次に提言通り，峠へ行って転んでみる，というスポーツ感覚の安易さが頭に浮かぶ．つまり，ここでは，けつまづいて，あちこち打ち付け，やっとのことで痛みをこらえて立ち上がって，帰ってきたときとはまるで異なった転び様であることを頭のどこかでイメージしたに違いないわけで，それなら，自分にできぬことはない，だめもとで試してみるのも賭けとしてもいいことだ，と思うに至った．もちろん，ここまで思い至るには，命のぎりぎりの極限状態にまで追い込んでいる必要がある．思い切った決断をするには，それだけの危機的状況に至っていなければならず，その為に，「そんなある日のこと」としばらくということは，病が命に関わる寸前まで悪くなってくる日時が必要であったのである．この時間は，トルトリの発想のためにも，おじいさんの納得のためにも，絶対必要な「間」であったのである．初めは半信半疑であったわけだが，トルトリの真剣さに押されながら決断することになった．当然，ここからは，おじいさんの単純な，短絡的な性格が読み取れるので，「しばらく」とは言いながら，否定的な疑いの論理を推し進める余裕などは生まれるはずもない．否，むしろ，この期に及んで，兎に角助かりたい，藁にもすがる思いで飛びついたのである．こうしたプロセスを補う中への，この唐突な行為における必然性が，トルトリの言への信憑性の獲得と相まって進んできたことを理解していかなければならないであろう．

2　トルトリのキャラクター ④

トルトリとは「賢くて可愛い男の子」という意味の普通名詞である[註2]．子どもが大人には見えない真実を見抜く純粋な目と力を持っているということは，何も，この国のことばかりではない．さて，少年トルトリは，村での信頼もある真面目でしっかり者の水車番である．彼は水車の回るのを眺めながらおじいさんの転がる姿を思いつく．生産的な生活を支えるための営みとしての水車は正に少年にとっての生きるよすがであった．転び回る姿をダブらせて少年は冷

静に自信をもっておじいさんに提言する．それは，この国の長幼の序によって裏打ちされた，思いやりに満ちた優しさと賢さによる人格の反映された，毅然とした申し出であった．

３　信憑性と確認 ④

唐突な申し出を受け入れられず逡巡して半信半疑であったおじいさんが，もう死を迎えるという危急存亡の自覚の果てに起こった藁にもすがる思いでトルトリの理屈に縋り，やっと受け入れた後に，トルトリの提言に従って，峠へ走ったのは，ここではじめて絶望から救われたい．と願う信仰にも似た強い生への渇望が生まれたからである．そしてこのことは，是非救いたいというトルトリの願いとの響き合いによって成立した相互の信憑性に基づいた必然的な行為であった．そしてこの時転ぶことで死への恐怖に襲われた事実は，転ぶことによって全く反対の生きることへの喜びに満たされることになる．一方，トルトリにしてみれば信頼してくれているおじいさんに対して，己の提言の確実性をここで確認しその成功を見極めなくてはならない訳で，言いっぱなしでは無責任きわまりないことになる．その為には少年の身でありながら僭越を省みず，励まし，応援し力強い庇護者としての役割を果たし，それを確認しなければならない．お互いの強い心のつながりが日常的に培われていたからこそ，若年者でありながらも勇気ある提言活動が成り立つことになったのである．こうした謙譲こそが秘かに歌をうたうという行為に凝縮されて現出したのである．

４　実践と歌 ① ⑥

おじいさんは初め勇気をもって意識的な回転を試みる．それは坂道ではなく，ゆるやかな起伏の少ない「とうげ」であった故に，まるで真四角な箱を転がすようにゴロンと底に尻餅を着くような一回転であった．トルトリは先回りして己の試みを確認すると，ぬるでの木の陰に隠れて応援を開始する．ここでの転び方の表現「ぺったんころりん」以下は，四角が六角になり，六角が八角形になり，やがて己の意思に関わりなく坂を転がり落ちるまりの様子を表している．「とうげ」がなだらかな傾斜で，ゴロン，ゴロンといったぎこちない転び

方に終始する場所であったからこそ，「ぺったん」が生きてくる．峠の姿がここで明らかになるわけである．それがやがて下り坂に至り，加速度がつくことによって，やっと自然に転がり落ちる．もう既に，あの意思によって試みた勇気は存在しない．転ぶことが恐怖から喜悦に転換した体験が（「しまいに，『とうげからふもとまで』ころころころりんと，ころがりおちてしまいました.」），おそらくは，トルトリのめざした理屈を超える身体的体験によって，初めて可能になる回生を実証したことになったのである．だからこそ「病気はなおった」のである．こうしてトルトリの解決方法への熟考から提言，更には確認行為までの一連のプロセスは完結をみるのである．トルトリの働きかけが全ておじいさんの言動に即応して成されていたこと，その心の底に優しい心根が行渡っていたこと，こうしたことからの信頼がおじいさんの行動を生み出してきたことに改めて目を向けるべきである．ここまで来て，場面の位置づけを考えると，それは既に述べてきたように，トルトリ少年の，長幼の序に裏打ちされた謙虚さが確認作用と相俟って現れたと読み取るべきだと考えるのである．よく，この場面の歌い手を，先に紹介した指導書のように，村人やおばあさんと想像させる授業を見るが，村人やおばあさんなら隠れる理由はなく，天使や神様などなら天か地かもっと包み込むような空気を通して響き渡ってくるほうが気が利いているといわねばならない．ちなみに，「歌ったのは誰でしょう」の最後の場面は，日本の教科書に掲載されるに当たって，新たに編集者と再話者の意向によって付け加わったとのことである．(註3) 以上述べてきたトルトリの思いやりや責任感を読者に再確認してもらうための一章として，この一言に気づかせるのでなかったら，この部分は蛇足であるといってよい．したがって，ここに至るトルトリの心の変容を初めから授業の中で位置づけておくことが必要である．

5　聞こえてきた歌の意味 ⑦

トルトリの知恵がものの見方の多様性にあることは紛れもない．そしてこのことは，般若心経のいっぱいの水を半分飲んでもう半分しかないと考える者と，まだ半分もあると考える者とがあるように，対象へのものさしは自分の思いの中に在る，という空の思想「不増不滅」(註4) と同じ発想を表しているが，こ

こでは，おじいさんを通して全ての読者に訴える意味を般若心経の呪文に当てはめて歌の解釈を置き換えて考えることができるような気がする．『片寄らない心，こだわらない心，とらわれない心，ひろくひろく，もっとひろく，これが般若心経，空の心なり』(註5)．要は，こうした心の働きが，苦境にぶつかったときに，固定観念から脱して，問題解決する力として発揮されるのだという主題を読み取ればいいのではないかと考えるのである．

Ⅲ　読みの基盤を支えるもの ② ③ ⑤ ⑦

長い歴史に於いて，外敵から常に侵略の憂き目にあってきたこの地域の人々は，一村落の共同生活の中で培われてきた共通の価値観や方向性を持って，それぞれの役割や年齢や性別に応じて，お互いの日常生活をより快適なものに向かって営んできた．そして，このことは，ひとり一村落だけのことではなく，「国土の70パーセント以上を小さな山や丘で占めるこの国の地域性に敷衍される．こうした共同体を切り裂くものこそが，コゲと呼ばれている「とうげ」なのである．しかしそれは，隣村へ行くには必ず越えねばならない必要不可欠なものであった．だから峠は，人生の岐路としての意義を担っている」(註6)象徴的なゾーンでもあった．「こうした二面性を持った中で人々はその苦しさにめげず，逞しさや明るさを伝統的に持ち続ける知恵を育んできたのである．」（同）その代表的人物として，おじいさんや村人たちの姿がある．伝承民話として受け継がれ(註7)，さらには再話されることになった「三年とうげ」をこうした土壌のもとに我々は読み味わっていかなければならないと思うのである．

さて，またこの国の民族性は，誠に極端な感情表現の側面をもっていた．それは，苦悩を乗り越えるための知恵と言ってよいのかも知れぬ．激しく泣き叫ぶことへの浄化作用として，「人々は大いに笑い，大いに喜ぶ，極端とも言える感情表現を共有財産として育んできた．」(註8) それは，おじいさんに象徴される，素直で，純粋で，優しくて，さらには単純な，激情的な性格となって表れる(註9)．繰り返すが，人々は必要性と死を呼ぶ排他性の二極の中で，この峠という境界に生き続けなければならず，そうした思いから，村人は昔から伝わる死とつながる迷信に縛られながら，同時にその制限から自由になりたいという願いを持

ち続けた．そしてそこから一刻も早く逃れるときを過ごそうと，明るく前向きに，楽しく生き続ける知恵として，軽快な歌を口ずさみ，なるべく気楽に生きる術を培ってきた[註10]のである．つまり，ここでは三年とうげで転べば三年きりしか生きられぬ，という言い伝えを，単なる，転ぶなよ，という戒めの意図に基づいた「教え」に過ぎないという軽い意識に置き換えることで，峠の持つ死のイメージの日常的な襲来から逃れようとする知恵を獲得して，人々は歌うような軽いリズムの言い伝えに変身させてしまっている．

この歌の持つ明るさ，軽さが，「転んだら死ぬ」という恐ろしさを感じられないのは，こうした人々の意図が生んだ生活の知恵なのかもしれない．暗く恐ろしい峠が，明るく逞しい歌のリズムとして民話の中に生き続けてきた背景には，そうした民族性のようなものが息づいていると思われる．

そして，その村落の人々が，そうしたことは互いに支えあい，助け合いながら，「豊かな心」を育て上げたことによる．しかし，恐ろしい言い伝えから解放されたいという願いを持ってはいても，実際には何の手立てもなく時間が過ぎる．単純素朴で，感情過多のおじいさんたちの中にあって，人々から信頼される賢い少年がまるで救世主のような存在として出現する．

儒教を踏まえた道徳をそのまま担った少年が，老人を大切に思うのは，長幼の序として，あるいは，「孫に教わる」[註11]というこの国の諺に現れているように，双方が互いに響きあうことで相手を尊重し，理解し合い助け合って，慈しみの心育てていく．

こうした人間性が地盤となって，この作品が成立しているということを，逆にこうした作品から，人々の生活を推測するという表裏の関係の中で捉えていくことが大切であり，そうでないと，この民話の持つ飛躍や省略による謎が解けない気がするのである．

作品をテキストとして，一つの分析の対象として，独立したものとして読み取るという方法[註12]が，小説教材の場合は最もふさわしいと思っているのだが，民話伝承，特に異国・異地域の世界を背景に持つ作品に対しては，それが通用しにくいようである．解釈にいくつもの無理が生じてきてしまうのである．それはリアリズム小説でも，ロマンとしての幻想・ファンタジーでもない第三の

分野としての民話伝承を踏まえた，再話という形態の持った特徴なのかもしれない．これらの補いを加えて，想像力を豊かに，明るい笑いをいざなう形態が，民話というものだと考えるのである．

以上，この再話を読む姿勢を基盤として見い出し得たことについて述べてきた．

Ⅳ　おわりに

以上で，「三年とうげ」の，とくに基盤としなければ必要としなければ分かりにくい部分の教材解釈を終えたいと思う．まだ，あれほど気をつけていたのに，なぜおじいさんは転んだのか，あるいは，おじいさんの体力は二度目に峠まで行けるほど回復していたのか等，理解できかねる部分も残っているが，これは今後の課題として考えていきたいと思う．だがここでは，この作品における出来事としての必然性が，それぞれの登場人物の育ってきた地域社会の中で培われた，人間相互の信頼関係によって支えられていることを確認して，この稿を終えることにする．

参考文献

「実践国語教育」　1997.　No.174　明治図書　註上の頁に示す
「ひろさちやの感動するお経」　ユーキャン

註

註１　「三年とうげ」と韓国・朝鮮の児童文学　仲林　修　p.23
註２　教材としての「三年とうげ」 菅原　稔　p.48
註３　指導書記載
註４　・ひろさちやの感動するお経
　　・「明るい未来を見る目を育てる」 権（クォン）　五勲（オフン）　p.44
　　この国では「一切唯心造」という言葉をよく使う，とある．
註５　薬師寺写経手本による和訳
註６　・「三年とうげ」から学ぶもの　金（キム）　基玉（キオク）　p.43
　　◎「三年とうげ」と韓国・朝鮮人の心　金（キム）　東勲（ドンフン）　p.28

註７　註２と同　p.48

註８　韓国の心と「三年とうげ」　崔（チェ）　和喆（ファチョル）・　李（イ）　愛玉（エオク）

「韓国は笑いのあふれる明るい人たちの国である」とある.

註９　・「朝鮮人は感情が激しいけど，喜びも悲しみもみんなで分かち合うんです．本当は，朝鮮の人は明るいと覚えといてください.」とある.

作者　李（リ）錦王（クムオギ）　講演記録 1994.8.24 19971 No.174中の論文である.

註10　註７と同　p.48

註11　註６◎と同　p.31

註12　ニュークリティシズム（新批評）

研究に際し、光村図書『国語 三下 あおぞら』（平成22年3月16日検定済）掲載「三年とうげ」の本文を参照した。